



台風13号による影響にお気を付けください

9月上旬に本州に接近した台風13号の影響により、水田では稲わらの偏りが目立っています。また、河川の氾濫や、水の流入に伴いジャンボタニシやナガエツルノゲイトウの漂着が懸念されます。以下の点を参考に今後の管理を行ってください。

1. 稲わらの偏り

稲わらが偏った状態のままほ場にすき込むと、田植え後の気温上昇を受け、有機物の急激な分解が起こり、有害なガスが発生することがあります。ガスの発生は稲に生育障害(ガス害)を起こします。

写真1：稲わらの偏り



偏った稲わらの対処方法

- ① 稲わらの流入があっても少ない場合
偏った稲わらをできるだけ均等に分散させて耕うん(深さ10~15cm)
- ② 稲わらの流入が多い場合
過剰な稲わらをほ場外(畦畔など)へ運搬
*ほ場1枚分程度(500~800kg/10a)までであればほ場内へ分散させ、耕うん(深さ10~15cm)

2. ジャンボタニシの漂着

例年ジャンボタニシを確認しないほ場においても、今回の大雨により貝が流され、漂着している可能性があります。そのまま越冬すると翌年に食害を受ける可能性があるため、早期耕うんを心掛け、越冬するジャンボタニシの数を減らしましょう。

ジャンボタニシの殺貝に効果的な耕うん方法

- ① 1回目の耕うん(秋耕)
慣行の作業速度での貝の破碎率は1/3未満。破碎率を上げるために、作業速度を遅く(1.3~1.5km/h)し、ロータリー回転を速く(PTO回転約800rpm)する。
- ② 2回目以降の耕うん(冬耕)
複数回の耕うんで貝の破碎率が高まる。作業速度は1回目と同様に遅く、ロータリー回転はさらに速く(PTO回転約950rpm)する。

3. ナガエツルノゲイトウの漂着

河川の氾濫や周辺ほ場からの水の流入によりナガエツルノゲイトウの生息地拡大が懸念されます。ほ場において確認した場合は、早期に対応を行い、ほ場への定着を防止しましょう。繁茂した場合、稲の生育が阻害される・収穫作業の邪魔になる等の問題が起こることがあります。

写真2：ナガエツルノゲイトウ

ナガエツルノゲイトウの除草方法

ナガエツルノゲイトウは茎や根の断片からも再生します。刈り払い機での除草は避け、登録農薬による除草を複数回行ってください。

(登録農薬についてや、見分けの難しい雑草を確認した場合は、農業事務所までお問合せください。)

